



日本カナダ学会 第48回年次研究大会

The 48th Annual Conference of the Japanese Association for
Canadian Studies

プログラム・報告要旨

Program and Abstracts

2023年9月16日（土）～17日（日）

September 16 (Sat.) – 17 (Sun.), 2023

国立民族学博物館

National Museum of Ethnology

および

Zoom Meeting

共催：国立民族学博物館（National Museum of Ethnology）

後援：カナダ大使館（Embassy of Canada to Japan, in Tokyo）

目次 / Contents

1. 大会概要	3
2. アクセスマップ	4
3. 大会プログラム	6
4. シンポジウムⅠ：カナダ北西海岸先住民の文化とアートー変化と現状ー.....	10
5. シンポジウムⅡ：カナダ日本人移民のパブリック・ヒストリー.....	17
6. セッションⅠ：自由論題.....	25
7. セッションⅡ：観光.....	31
1. Conference Outline	3
2. Access Map	4
3. Program	8
4. Symposium I : Art of Canada' s Northwest Coast Peoples: Change and Current Status	10
5. Symposium II : Public History for/with Japanese Canadian Immigrants	18
6. Session I : Open Topics.....	26
7. Session II : Tourism.....	32

第48回年次研究大会

実行委員会

委員長：岸上伸啓 (Nobuhiro KISHIGAMI)

委員：岩崎佳孝、新山智基、伊藤敦規、齋藤玲子、平野智佳子

(Yoshitaka IWASAKI, Tomoki NIIYAMA, Atsunori ITO, Reiko SAITO, Chikako HIRANO)

企画委員会

委員長：河原典史 (Norifumi KAWAHARA)

委員：石川涼子、和泉真澄、河上幸子、浪田陽子

(Ryoko ISHIKAWA, Masumi IZUMI, Sachiko KAWAKAMI, Yoko NAMITA)

大会概要

日時：2023年9月16日（土）・17日（日）

- ・第1日（16日）10時00分受付開始（オンライン同） 10時30分開会 17時30分終了予定
 - ・第2日（17日）10時00分受付開始（オンライン同） 10時30分開会 15時00分終了予定
- 総会は、16日16時30分～17時20分。対面とオンライン併用で行います。
欠席の方は、事務局から配信された総会出欠確認フォームから委任状をご提出ください。

会場：

【現地会場】〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

国立民族学博物館（みんぱく）は千里万博公園内にあります。入園料は260円です。

【オンライン会場】Zoom Meeting

接続に必要な URL やミーティング ID などの情報は、出欠確認登録フォームに入力いただいた電子メールアドレスに、9月10日（日）までにお知らせ致します。

出欠：ご出席の方は、URL (<https://forms.gle/DDWZzCMuF3hm2iTC9>) の出欠確認フォームから、9月4日（月）までにご登録をお願いします。本年度は、紙媒体での出欠確認はいたしません。この URL は、JACS のウェブサイト (<http://jacs.jp/>) にも掲載しています。

昼食：お弁当の斡旋はいたしません。お弁当をご持参いただくか、民博レストランや万博公園内のレストランをご利用ください。モノレール万博記念公園駅の改札口そばに、コンビニがあります。

懇親会：16日17時30分開始：「森の洋食 グリルみんぱく」にて開催します。参加希望の方は、参加申込フォームにその旨を入力し、後日に5,000円を指定された口座へ払い込んでください。

参加形態：上記の出欠確認フォームには、「対面（現地）出席」「オンライン」の選択があります。登録日時点でのご希望を選択してください。発表者の場合は、現地参加をお願いします。

変更：9月4日までは出欠確認フォームをご利用いただけます。当初の登録から変更する場合には、再度必要事項をご記入のうえ、ご提出ください。なお、9月4日24時をもって出欠確認フォームが閉鎖されますので、それ以降の各種変更や参加登録につきましては、inuit@minpaku.ac.jp まで連絡してください。

宿泊：宿泊場所の手配に関しては、各自で行ってください。京都・奈良方面には観光客が多いため、早めのご予約をお奨めします。

公開：9月16日の基調講演とシンポジウムは一般公開プログラムです。会員以外の方の現地参加、およびオンライン参加ともに参加料は不要です。

その他：プログラム・報告要旨は、学会ホームページに掲示します。会場では配布しませんので、必要な方はプリントアウトのうえご持参下さい。<http://jacs.jp/>

アクセスマップ (<https://www.minpaku.ac.jp/information/access/expopark>)

飛行機ご利用

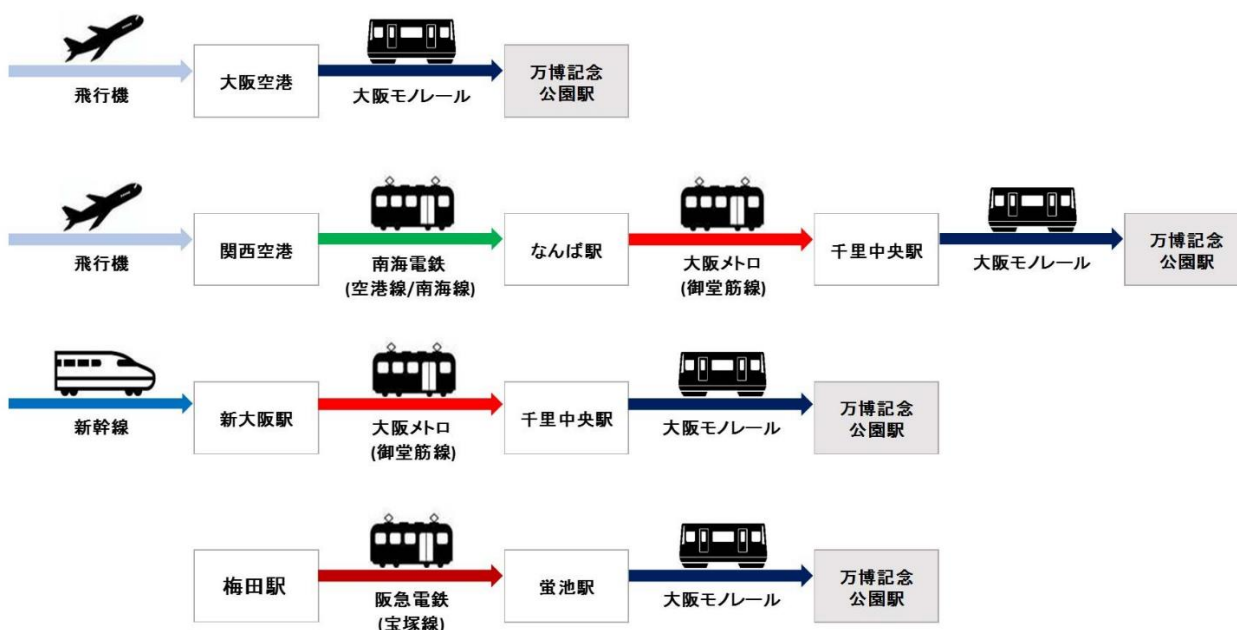
- ・大阪空港から、大阪モノレールで万博記念公園駅
- ・関西空港から、南海電鉄（「なんば駅」乗り換え）→大阪メトロ御堂筋線（「千里中央駅」乗り換え）
大阪モノレールで万博記念公園駅

新幹線ご利用

- ・新大阪駅から、大阪メトロ御堂筋線（「千里中央駅」乗り換え）→大阪モノレールで万博記念公園駅

その他の路線

- ・梅田駅から、阪急電鉄宝塚線（「蛸池駅」乗り換え）→大阪モノレールで万博記念公園駅



バス

- ・在来線 → 路線バス → 「万博記念公園駅」または「公園東口駅」
- ・阪急京都線「茨木市駅」から、近鉄バス《阪大病院、美穂が丘行き》24・25系統「日本庭園前」バス停 → 万博記念公園東口
- ・JR 京都線「茨木駅」から、近鉄バス《阪大病院、美穂が丘行き》24・25系統「日本庭園前」バス停 → 万博記念公園東口
- ・JR 京都線「茨木駅」から、近鉄バス・阪急バス《万博記念公園駅（エキスポシティ前）行き》100系統（土日のみ）「日本庭園前」バス停 → 万博記念公園東口もしくは「万博記念公園前」バス停 → 万博記念公園中央口

タクシー

- ・タクシーをご利用の場合は、日本庭園前駐車場までのご利用が便利です。



万博公園内の地図（中央口から国立民族学博物館まで徒歩で約15分です）
https://www.expo70-park.jp/sys/wp-content/uploads/park_map_202103.pdf

日本カナダ学会第48回年次研究大会プログラム

日時：2023年9月16日（土）・17日（日）

会場：（現地参加）国立民族学博物館 2階第4セミナー室（会員控え室：第3セミナー室）
（オンライン参加）Zoom Meeting

<第1日> 9月16日（土）（オンライン併用ハイブリッド形式）

10:00 受付（本館2階）

10:30 開会のあいさつ

10:35-10:40 シンポジウム I：カナダ北西海岸先住民の文化とアートー変化と現状ー

司会・趣旨説明：岸上 伸啓（国立民族学博物館）

10:40-11:20 基調講演：宝物と所蔵物の過去、現在、未来ーカナダ北西海岸先住民のアートー

ジェニファー・クラマー（ブリティッシュ・コロンビア大学）

11:25-12:20 報告

(1)カナダ北西海岸先住民のスクリーン版画

岸上 伸啓（国立民族学博物館）

(2)ある内陸トリンギット彫刻家の人生とアート

山口 未花子（北海道大学）

総合討論

12:35-13:55 昼食：理事会

カナダ北西海岸先住民のアート版画展（自由見学）

14:00-16:15 シンポジウム II：カナダ日本人移民のパブリック・ヒストリー

司会：庭山 雄吉（上智大学）

(1) パブリック・ヒストリーとは何かー地域に生きるアカデミズムー

河上 幸子（京都外国語大学）

(2) 和歌山県美浜町カナダミュージアムの取り組み

三尾 たかえ（カナダミュージアム）

(3) 『グランドフォークス在留日本人記念写真帖』から読み解く日本人移民の強制移動

河原 典史（立命館大学）

(4) カナダにおける日系史研究共同プロジェクトとの連携について

和泉 真澄（同志社大学）

総合討論

16:30-17:20 総会

17:30-19:30 懇親会 会場：森の洋食 グリルみんなぱく

参加費：5,000円

（国立民族学博物館 本館1階・06-6875-0401）

<第2日> 9月17日(日)(オンライン併用ハイブリッド形式)

10:00 受付(本館2階)

10:30-12:00 セッションI:自由論題

座長:石川 涼子(立命館大学)

(1) 都市先住民ホームレスの背景—植民地主義政策による影響を中心に—

徳田 恵(神戸大学)

(2) 1960・70年代におけるカナダ・ナショナリズムの思想的多面性

高橋 侑生(京都大学)

(3) カナダモデルへの転換—聴覚障がい者から手話者へ—

伊藤 泰子(名古屋学院大学)

12:00-13:00 昼食

13:10-14:40 セッションII:観光

座長:浪田 陽子(立命館大学)

(1) 旅行メディアにおけるカナダの魅力

—『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編と『るるぶカナダ』シリーズの事例—

岩田 晋典(愛知大学)

(2) カナダの先住民観光

半藤 将代(カナダ観光局)

(3) 1970年日本万国博覧会におけるカナダの忘却された存在感

—観光とナショナリズム—

鈴木 健司(同志社女子大学)

14:50-15:00 閉会の辞

大石 太郎(JACS 副会長/関西学院大学)

The 48th Annual Conference of the Japanese Association for Canadian Studies (JACS)

Date: September 16-17, 2023

Venue: (On-site) National Museum of Ethnology (Main building the second floor)

(On-line) Zoom Meeting

< Day 1 > Saturday, September 16, 2023

10:00 **Registration**

10:30 **Opening Address**

10:35-10:40 **Symposium I : Art of Canada's Northwest Coast Peoples: Change and Current Status**

Chair: Nobuhiro Kishigami (National Museum of Ethnology)

10:40-11:20 **Keynote Speech: Past, Present, and Future Treasures and Belongings: Art of Canada's Northwest Coast Peoples**

Jennifer Kramer (Museum of Anthropology/University of British Columbia)

11:25-12:20 **Presentations**

(1) Screen Prints of Canada's Northwest Coast Peoples

Nobuhiro Kishigami (National Museum of Ethnology)

(2) Life and Art of the Inland Tlingit Carver

Mikako Yamaguchi (Hokkaido University)

General discussion

12:35-13:55 **Lunch / Board Meeting**

Screen Prints exhibition of Canada's Northwest Coast Peoples (Free visit)

14:00-16:15 **Symposium II : Public History for/with Japanese Canadian Immigrants**

Chair: Yukichi Niwayama (Sophia University)

(1) Public History as Academic Practice for All

Sachiko Kawakami (Kyoto University of Foreign Studies)

(2) The Initiatives of Canada Museum, Mio, Wakayama

Takae Mio (Canada Museum)

(3) Forced Removal of Japanese Canadian in WW II : Analysis of Memorial Photobook of Japanese-Canadian Families in Grand Forks "*Zairyu Nihonjin Kinen Syashinchou*"

Norifumi Kawahara (Ritsumeikan University)

(4) International Collaborations between Canada and Japan on Japanese Overseas Migration

Masumi Izumi (Doshisha University)

General discussion

16:30-17:20 **General Meeting**

17:30 **Reception**

Venue: Restaurant, First Floor, main building of the National Museum of Ethnology

Phone:06-6875-0401/ Fee: JPY 5,000

< Day 2> Sunday, September 17, 2023

10:00 Registration

10:30-12:00 Session I: Open Topics

Chair: Ryoko Ishikawa (Ritsumeikan University)

(1) Background of Urban Indigenous Homelessness: Focusing on the Impact of Colonial Practices

Megumi Tokuda (Kobe University)

(2) The Variety of English Canadian Nationalism in the 1960s and 1970s

Yusei Takahashi (Kyoto University)

(3) Converting to the Canadian Model: From Hearing Impaired to Signers

Yasuko Ito (Nagoya Gakuin University)

12:00-13:00 Lunch

13:10-14:40 Session II: Tourism

Chair: Yoko Namita (Ritsumeikan University)

(1) The Attractiveness of Canada in Travel Media: A Case Study of “*Chikyu no Arukikata*

Guidebook” Series, Canada edition, and “*Rurubu Canada*” Series

Shinsuke Iwata (Aichi University)

(2) Indigenous Tourism in Canada

Masayo Hando (Destination Canada)

(3) Canada’s Forgotten Presence at the 1970 Japan World Exposition: Tourism and Nationalism

Kenji Suzuki (Doshisha Women’s College of Liberal Arts)

14:50-15:00 Closing Address

Taro Oishi (Vice-President of JACS /Kwansei Gakuin University)

シンポジウム I (一般公開)

「カナダ北西海岸先住民のアート—変化と現状—」

岸上 伸啓 (国立民族学博物館)

(趣旨)

国立民族学博物館では企画展「カナダ北西海岸先住民のアート——スクリーン版画の世界」を2023年9月7日から12月12日まで開催する。その期間中に日本カナダ学会第48回研究大会が開催され、国立民族学博物館は日本カナダ学会と共催で国際シンポジウム「カナダ北西海岸先住民のアート—変化と現状—」を開催することになった。本シンポジウムでは、同博物館の企画展との関連でカナダ北西海岸先住民のアートの歴史と現状について検討する。

Public Symposium I (Overview)

Art of Canada's Northwest Coast Peoples: Change and Current Status

Nobuhiro Kishigami (National Museum of Ethnology)

The Thematic Exhibition, "Screen Prints of Canada's Northwest Coast Peoples," will take place from September 7 to December 12, 2023, at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan. In association with the exhibition, we decided to have an international symposium on the art of Canada's Northwest Coast Peoples, co-organized by the Japanese Association for Canadian Studies and the National Museum of Ethnology. It will examine the history and status quo of art created by the Northwest Coast Peoples, Canada.

基調講演

「過去、現在、そして未来の宝物と所有物 - カナダの北西海岸先住諸民族のアート」

ジェニファー・クラマー（ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館）

ブリティッシュ・コロンビア州（カナダ最西部）の沿岸地域の先住諸民族は、18世紀に最初のロシア人、スペイン人やイギリス人の探検家と交易して以来、独特でユニークな物質文化を有していることで知られています。一般に「カナダの北西海岸先住諸民族のアート」として知られるオブジェクトを、ベルリン、ストックホルム、パリ、ロンドン、オスロ、ニューヨーク、大阪などにある民族学博物館がこぞって収集してきました。本講演では、これらの制作物が好奇心、標本、工芸品、原始アート、アート、そして最近では宝物や所有物としてどのように評価されてきたかという変化を跡付けます。

これまでの多くの研究は、この物質文化の歴史的機能を日用品や儀式のオブジェクトとして、20世紀には経済的生計手段やカナダのナショナリズムや観光の象徴として、注目してきました。しかし最近では、現代の多様な意味や解釈に注目が移っています。これらの作品は、21世紀の美的かつ政治的に洗練されたアートとして公共および私立のギャラリーに入るにふさわしいものとして称賛され、若者やこれから生まれてくる人々にとって先住民アイデンティティに誇りを感じるためのインスピレーションとして、さらには領土を保護管理する者としてや現在進行中の植民地化に対して自分たちの主権を主張する運動家の証拠としても祝福されています。先住民の学者であれ、非先住民の学者であれ、学者は、先住民の知識保持者—長老や指導者、教師、アーティスト—が先祖の制作した歴史的な作品に接するやり方を尊重しています。これらの変化し続ける意味を考慮に入れて、カナダの北西海岸先住民のアートの将来について考えてみたいと思います。

**Past, Present, and Future Treasures and Belongings:
Art of Canada's Northwest Coast Peoples**

Jennifer Kramer (Museum of Anthropology/University of British Columbia)

Indigenous Peoples from the coast of British Columbia (the western most province of Canada) have been recognized for their distinct and unique material culture since the first Russian, Spanish, and British explorers traded for examples in the 18th century. Known generally as the 'Art of Canada's Northwest Coast Peoples,' these objects have been coveted and collected by museums of ethnography in urban centres such as Berlin, Stockholm, Paris, London, Oslo, New York, and Osaka. In this presentation, I will trace the changing ways these works have been valued as curiosities, specimens, artifacts, primitive art, art, and more recently treasures and belongings.

While much previous research has focused on the historical function of this material culture as everyday tools or ceremonial objects, and in the 20th century as a means of economic survival or as symbols of Canadian nationalism and tourism, more recently, attention has shifted to a multiplicity of contemporary meanings and interpretations. They are celebrated as aesthetically and politically sophisticated 21st century art deserved of entry into public and private galleries, as inspiration for pride in Indigenous identity by youth and those not yet born, and as evidence of territorial stewardship and activist assertions of sovereignty in the face of ongoing colonial injustices. Scholars, whether Indigenous or non-Indigenous, respect the way Indigenous knowledge holders -- elders, leaders, teachers, or artists -- approach these historic works made by the hands of their ancestors as treasures and belongings. We will reflect on the implications for the future of the art of Canada's Northwest coast peoples given these burgeoning meanings.

カナダ北西海岸先住民のスクリーン版画

岸上 伸啓 (国立民族学博物館)

カナダの太平洋沿岸には、北西海岸先住民と呼ばれる人々が生活を営んでいる。彼ら/彼女らはポトッチ儀礼を実施し、巨大なトーテムポールを制作してきたことでよく知られている。北アメリカ北西海岸先住民は 18 世紀後半のヨーロッパ人との接触後、それ以前に比べるとはるかに急激な社会・文化変化を体験した。北西海岸先住民社会・文化の衰退の歴史は、1950 年代のポトッチ儀礼やそれに付随するトーテムポール制作や儀礼具制作の再開によって大きく変わり、伝統文化の復興への道を歩み始め、1960 年代から 1970 年代にかけて先住民文化のルネッサンスと呼ばれるほどの活況を呈した。1960 年代以降に伝統文化の復興や創造的継承の推進力のひとつとなったのはアート制作であった。北西海岸先住民アートとは、大別すれば、トーテムポールや仮面などの木彫品、かご細工、銀製腕輪などの宝飾品、アージライト石製彫刻品、織物、そして版画である。

本発表の目的は、1960 年頃から制作が始まった北西海岸先住民版画のモチーフや表現方法、技法の変化について検討するとともに、カナダの北西海岸先住民社会において版画が果たした経済的・文化的・政治的・社会的役割について考察を加える。

(参考文献)

岸上伸啓 (2015) 「カナダにおける先住民アートの展開について」 齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題－国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 (SER)131 号) pp. 23-44, 大阪: 国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編 (2010) 『極北と森林の記憶－イヌイットと北西海岸インディアンの版画－』京都: 昭和堂。

Young, India Rael (2017) Cultural imPRINT: a History of Northwest Coast Native and First Nations Prints. Ph.D. Dissertation, Dept. of Art History, University of New Mexico, Albuquerque, USA.

Screen Prints of Canada's Northwest Coast Peoples

Nobuhiro Kishigami (National Museum of Ethnology)

Along the Pacific coast of Canada, there are people known as the Northwest Coast People who have been living. They are well-known for their practice of potlatch ceremonies and the making of enormous totem poles. The Northwest Coast People experienced much more rapid social and cultural changes compared to before, following contact with European fur traders in the late 18th century. The history of decline in societies and cultures of Northwest Coast People underwent significant changes with the resumption of potlatch ceremonies, the accompanying production of totem poles and ceremonial objects in the 1950s. This marked the beginning of a path towards the revival of traditional culture, and from the 1960s to the 1970s, there was a flourishing period called as "Indian Renaissance". Art production played a crucial role in the revival and creative continuity of traditional culture since the 1960s. Art of Northwest Coast People includes, broadly speaking, wood carvings such as totem poles and masks, basketry, silver jewelry, argillite carvings, weaving, and printmaking.

The aim of this presentation is to examine changes in the motifs, modes of expression, and techniques in printmaking of Canada's Northwest Coast Peoples that began around the 1960s. Additionally, it aims to consider the economic, cultural, political, and social roles played by printmaking in their societies in Canada.

(References)

- 岸上伸啓 (2015) 「カナダにおける先住民アートの展開について」 齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題－国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 (SER)131号) pp. 23-44, 大阪:国立民族学博物館。
- 齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編 (2010)『極北と森林の記憶－イヌイトと北西海岸インディアンの版画－』京都:昭和堂。
- Young, India Rael (2017) Cultural imPRINT: a History of Northwest Coast Native and First Nations Prints. Ph.D. Dissertation, Dept. of Art History, University of New Mexico, Albuquerque, USA.

ある内陸トリンギット彫刻家の人生とアート

山口 未花子（北海道大学）

カナダのユーコン準州およびBC州には内陸トリンギットのコミュニティが3か所存在している。内陸トリンギットは北西海岸諸民族の一角をなすトリンギットの一部をなす集団であるが、もともと内陸に暮らしていたカスカやターギッシュといったアサバスカン系の人々が暮らす土地に移住してきたトリンギットが内陸に定着する過程で、アサバスカンの人々と婚姻などを通して関係を深める中で形成された比較的新しい集団である。

よく知られているように、北西海岸諸民族のアートは1885年のポトラッチ禁止などに伴い危機に瀕した時期を乗り越えて復興し、今日新たな展開を見せている。内陸トリンギットにおいても毎年のようにトーテムポールが建てられるなど、アートはコミュニティにおいて非常に重要な役割を果たしている。しかし内陸トリンギット・アートが今日のような隆盛をみせるようになるまでの道程は、海岸のトリンギットのそれとは少し経緯を異にしている。それは新しく形成された内陸トリンギットという集団が、そもそも初期においてはあまりアート、特に視覚芸術を製作していなかったのに対し、第2、第3世代の内陸トリンギットが北西海岸アートの復興が進む中で、トリンギットやハイダ、タルタンのアーティストから学び、自分たちのアートを新たに創造したという側面が強いからである。

本発表ではユーコンを代表するアーティストであるキース・ウルフを取り上げる。彼は、内陸トリンギット・アーティストの第一世代としてとしてユーコンの要所につくられたアートの多くを製作し、現在もトーテムポール製作の指揮をとるなど中心的な役割を果たしている。彼の人生たどることで内陸トリンギット・アートの歴史と今日的転回を概観したい。

Life and Art of the Inland Tlingit Carver

Mikako Yamaguchi (Hokkaido University)

There are three Inland Tlingit communities in the Yukon Territory and BC, Canada. The Inland Tlingit are part of the Tlingit Northwest Coastal Peoples, a relatively new group that formed when the Tlingit migrated to the lands of the Athabascan peoples such as Kaska and Tagish who originally lived inland and established themselves, and developed relationships with the Athabascan people through intermarriage and other kind of relationship.

As is well known, the art of the Northwest Coast peoples has been revived after a period of crisis following the 1885 ban on potlatches, and now showing new developments. Inland Tlingit art also plays a very important role in the community today, with totem poles being erected almost every year. However, the process of Inland Tlingit art's rise to its current prominence is somewhat different from that of Coastal Tlingit. While the newly formed Inland Tlingit group did not produce much art, especially visual art, in the beginning. The second and third generation inland Tlingit artists learned from Tlingit, Haida, and Tartan artists and created their own art in a new way.

In this presentation I will focus on Keith Wolfe, one of Yukon's leading artists. As one of the first generation of inland Tlingit artists, he created many of the artworks created in key locations in Yukon, and continues to play a central role as a master carver in directing the creation of totem poles. By tracing his life, we would like to give an overview of the history of Inland Tlingit art and the turn it has taken today.

パブリック・ヒストリーとは何か —地域に生きるアカデミズム—

河上 幸子（京都外国語大学）

和歌山県日高郡美浜町三尾地区（通称アメリカ村）は、戦前期にカナダに移民を送出した村として、1950年代以降、研究者やメディアから一定の注目を集めてきた。1953年には東京大学で教鞭をとっていた社会学者の福武直氏が1951年時点で調査にたずさわった『アメリカ村 移民送出村の実態』（東京大学出版会）と『海外移民が母村に及ぼした影響 和歌山県日高郡三尾村実態調査』（毎日新聞社人口問題調査会）が出版された。1958年には小中学校の社会科教材のなかでもアメリカ村はとりあげられた。また、1962年には人類学者の蒲生正男氏が、移民先のカナダ側での聞き取り調査も含めた編著『海を渡った日本の村』（中央公論者）を鶴見和子氏や青柳清孝氏、ロナルド・ドーア氏らと刊行した。1970年代に入ると、京都大学地理学研究室の学生が調査に入り報告書をまとめ（『コンター24号』1974）、NHKがドキュメンタリー映像を制作した（『新日本紀行 アメリカ村—和歌山県美浜町三尾—』1974）。そして2000年には、山田千香子氏の『カナダ日系社会の文化変容—「海を渡った日本の村」三世代の変遷』が刊行された。こうした20世紀後半にみる三尾に関する調査や研究は、地域の郷土史家と呼ばれる人たちのサポートによるところも大きかった。

一方、今日、三尾のカナダ移民史についての調査活動は、もはや研究者やジャーナリストの専売領域ではない。地域の歴史を残したい地元関係者やふるさと教育に携わる教育関係者、その地域性に魅力を見出し都会から移り住んできたIターン・Jターン・Uターン者、そして三尾出身の祖先をもちルーツ探しにやってくる海外日系人など、モチベーションも多岐にわたり調査ニーズも多様化している。つまり、2000年代以降に興隆がみられるパブリック・ヒストリーの流れは、三尾という地域において生きるアカデミズムのコンテクストとして見出すことができる。国境を越えて展開する家族や地域についての記憶を、様々な立場の人たちがそれぞれの方法や規模で、保存し伝承しようと歴史学の領域に研究主体として参画している現況がある。

私たちは、こうした今の三尾の状況をふまえて、日加にまたがる地域関係者を単なる情報提供者や調査対象者として位置づけるのではなく、次世代に向けたカナダ移民史の再発掘や伝承の実践者として捉え、研究成果の社会共創を目指そうとしている。歴史をパブリックなものとして開くことは、歴史継承と経済活動の両立をいかにはかるかという課題や、立場性や利害の相違をいかに乗り越えるか、またパブリックに開かれた研究成果の発信のありかたとはどのようなものなのかという問題に取り組むことをも意味し、その過程は容易ではない。本発表では、私たちのこれまでの取り組みを紹介し、フロアとの意見交流のきっかけを作れたらと考えている。

Public History as Academic Practice for All

Sachiko Kawakami (Kyoto University of Foreign Studies)

Since the 1950s, the Mio district of Mihama-cho, Hidaka-gun, Wakayama Prefecture (commonly known as Amerika Mura) has attracted attention from researchers and the media as a village that sent people to Canada in the prewar period. 1953 saw the publication of two books on Amerika Mura based on the research conducted by Tadashi Fukutake, a professor teaching at Tokyo University. In 1958, Amerika Mura was included in social studies textbooks for elementary and junior high schools. In 1962, anthropologist Masao Gamo, together with Kazuko Tsurumi, Kiyotaka Aoyagi, and Ronald Dore published "Umi wo watatta Nihon no Mura (A Japanese Village Across the Sea)," which included interviews with immigrants on the Canadian side. In the 1970s, geography students from Kyoto University conducted field research and compiled a report ("Contour No. 24," 1974), and NHK produced a documentary film ("Shin Nihon Kiko Amerika Mura: Mio, Mihama-cho, Wakayama Prefecture," 1974). In 2000, "Kanada Nikkei Shakai no Bunka Henyo `Umi wo watatta Nihon no Mura`Sansedai no Hensen" was published by Chikako Yamada, an anthropologist who focused on the cultural transformation of the Japanese Canadian society through her research both in Mio and in Canada. As shown above, most of the studies on Mio in the 20th century were conducted by academics and journalists with support from local historians in the area.

Today, however, research on the history of emigration from Mio is no longer the exclusive domain of researchers and journalists. There are now a wide variety of motivations and research needs, including local people who want to preserve local history, educators involved in hometown education, I-turners, J-turners, and U-turners who have moved to Mio from the city because of its attractiveness, and Japanese Canadians who have ancestors from Mio and come to search for their roots in the area. In other words, the public history trend that has been flourishing in humanities since the 2000s can be seen not just as an ideological idea but also as a practical local context for the Mio community. People from various backgrounds are now participating in the field of history to preserve and pass on memories of families and communities that transcend national borders, in their own ways and on their own scale.

The purpose of our research project with people in Mio and Canada is to co-create public history projects for the next generation. Opening history to the public also means addressing the challenging issues of how to balance historical inheritance and economic activities, how to overcome differences in position and interests, and how to disseminate research results openly to the public etc. In this presentation, I would like to introduce some of our cases and discussions and provide an opportunity to exchange opinions with the floor.

和歌山県美浜町カナダミュージアムの取り組み

三尾 たかえ（カナダミュージアム）

和歌山県の最西端、紀伊水道に面した三尾地区は万葉集にも三穂の浦として登場する古くから知られた土地である。三尾地区の郷土史は、工野儀兵衛氏の存在抜きに語れない。工野儀兵衛氏は1888年に和歌山県で初めてカナダへ渡航し、郷土から人々を呼び寄せカナダ水産業に寄与するとともに、郷土の繁栄にも貢献した人物として知られている。

工野儀兵衛氏の渡加から135年経過し、現在、三尾地区は深刻な少子高齢化に直面している。三尾地区の人口構成は60%以上が65歳以上で、0歳～18歳までの人口は20人に満たないという現状である。さらに、アメリカ村カナダ資料館初代館長の小山茂春氏や、2代目館長でカナダ学会でも活躍された西浜久計氏など、かつて三尾の歴史継承に尽力し外部の研究者との架け橋にもなってきた郷土史家たちも、もはやいない。このままではかつてアメリカ村として栄えた村も、またカナダ移民送出の記憶も人と共に消えてしまう。このような危機的な状況のもと、次世代へのふるさと教育と歴史の継承は喫緊の課題であった。

地方創生事業がはじまり、2015年に閉館したカナダ資料館にかわるカナダミュージアムが2018年に三尾に誕生し、翌年には、地域の中高校生が三尾地区のカナダ移民の歴史を学び広い世界を知ることで自分たちの住む土地に誇りと自信を持ってもらおうと「Let's Kataribe Project」が始動した。受講生が少ないのは少子化のなかでやむを得ないことだが、熱意ある講師役の有志も集まり精力的に活動している。

しかしながら問題は、地域の高齢化により今すぐ取り組まなければならない課題が山積していることであり、またカナダ移民送出地としての記憶を保存し将来にわたって活用していくためには、地元住民だけでは課題の解決は不可能なことだった。地元住民として働ける部分以外の専門性が必要な分野は、研究者の助け無くしては課題の達成はできない。私たちにはどのような助けが必要であるのか。また、零細なローカルミュージアムが専門家に依頼できるだけの資金的な余裕がどこにあるのか。

途方に暮れるような状況であった時、私たちのNPO法人日ノ岬・アメリカ村が行っている事業を通じて交流を深めていた大学の先生から共同研究「出移民史を通じた次世代育成のための地域密着型パブリック・ヒストリーの構築」の提案がなされた。従来の研究の形は、研究する側が研究される側から必要な情報の提供を受けて終了するのが普通であると承知していたが、これは違った。この研究課題名の中の「地域密着型」の文言が示すように、まさに地域住民との共同研究を指していた。

私たちにとって未知の住民参加型の新しい研究は、地元の当たり前すぎる事柄を違う角度から見つめ直す作業の連続であった。そのような中で、分かっていたつもりだった事柄が実は何も知らなかったのだと気付かされた。また、過去のことであっても驚きとともに改めて奥深い人々の営みを知らされた。私たちにとって、共同研究の一端に参加させていただくことは郷土の再発見でもあった。この過去と未来を繋ぐ成果物が地域にもたらされ、現在もこれから先も次世代育成の糧とし地域活性化に活用していきたい。

The Initiatives of Canada Museum, Mio, Wakayama

Takae Mio (Canada Museum)

The Mio district, facing the Kii Channel at the westernmost tip of Wakayama Prefecture, has long been known as Mihonoura, which also appears in the Manyoshu, the oldest extant collection of Japanese poetry. The local history of Mio cannot be told without mentioning Gihei Kuno. In 1888, Gihei Kuno became the first person from Wakayama Prefecture to migrate to Canada, where he contributed to the Canadian fishing and cannery industry by bringing people from his hometown.

135 years have passed since Gihei Kuno's first arrival in Canada, and the Mio district is currently facing a serious decline in birthrates and an aging population. More than 60% of the population in Mio is over 65 years old, with less than 20 people between the ages of 0 and 18. In addition, there used to be renowned local historians such as Shigeharu Koyama and Hisakazu Nishihama who worked hard to pass on Mio's history and served as bridges between Mio and outside researchers. But they are no longer with us. If this situation continues, the once prosperous Amerika Mura and the memory of the emigration will disappear.

The community-based public history project was conceived because of a local development project, which saw the opening in July 2018 of the Canada Museum in Mio, run by the NPO Hinomisaki Amerika Mura, a community development organization run by local residents. In April 2019, the non-profit organization started an English-language storytelling program (Let's Kataribe Project) to give local junior high and high school students a sense of pride and confidence in their own community by learning about the history of overseas migration in the Mio area and beyond. The small number of students has been unavoidable due to the declining birth rate, but the project has attracted a number of enthusiastic local volunteers to serve as lecturers. At the same time, the Canada Museum was beginning to function as a cultural device which can serve to pass on local history as well as serving those who have come to Mio from Canada to find their ancestral roots.

Since the Canada Museum is a small community-run museum without a licensed curator and much funding, it was difficult to ask for professional help. Under such circumstances, the joint research plan was proposed by a group of scholars who have already associated with the Mio district, and it provided us a roadmap. I was aware that the conventional form of research usually ends with the researcher receiving the necessary information from the researched. However, this was not the case. As the phrase "community-based" in the title of this research project indicates, it was the beginning of a new type of research with the participation of local residents, something we had never done before. We had to reevaluate things that were too common in the local community from a different angle. In the process, I was surprised to realize that what I thought I understood as a local resident was actually something I knew nothing about, and being a part of the joint research was a rediscovery of my hometown. I hope that this mutual work that connects the past and the future will be continued, and that the outcome will be used to nurture the next generation of Mio and beyond, both now and in the future.

『グランドフォークス在留日本人記念写真帖』から読み解く日本人移民の強制移動

河原 典史（立命館大学）

和歌山県美浜町三尾にある古民家を改修したカナダミュージアムには、多くのカナダ日本人移民に関する史資料が所蔵されている。その1つに、『グランドフォークス在留日本人記念写真帖』がある。茶色の革カバーがかけられたおよそ縦70mm×横110mm・72頁からなるこの写真帳は、1946年3月に「グランドフォークス日本人会」が編集したものである。グランドフォークスの様子がわかる景観写真に続いて、56家族・248名からなる家族写真が収められている。彼らの服装と3月に刊行されたことを考えると、撮影されたのは1945～46年の冬季であろう。ただし、結婚式や他の季節、そしてグランドフォークス以外で撮られたものもある。そして、巻末にはアルバム作成の経緯説明と、それを担った4人の記名がある。

ここへ自由移動地として日本人が集住するようになった最大の要因は、三尾出身の中谷江須松ファミリーとその呼び寄せによるものである。渡加時に移住したスティーブストンから、同郷者が先住していたケロウナへ移動した中谷ファミリーは、よりよい農業環境を求めて1939年にグランドフォークスへ移った。太平洋戦争の開戦によって日本人の強制移動が始まると、中谷ファミリーを頼って多くの人びとがここへ自由移動したのである。

写真帳に収められた日本人以外に、Landscapes of Injustice Archive内のCustodian Case Filesによれば、グランドフォークスには合計90家族・399人が収容されていた。彼らのカナダにおける直前の居住地をみると、最も多いのは和歌山県三尾出身者を中心とする32世帯・143人からなるフレーザー川河口のスティーブストンである。それに続くのが15家族・67人のパウエル地区、そして13世帯・68人からなるパウエル地区以外のバンクーバーになる。これらでは、滋賀県出身者が多くを占めている。

残りの約3割は、他地域からの移動となる。プリンスルパートの4家族・10人を除けば、他の19ヶ所は1世帯または2世帯のみとなる。それらの多くは沿岸部にあり、日本人のほとんどは漁業に携わっていた。リバーズインレット、プリンスルパートとスキーナ・リバーは、スティーブストンと同様にサケ缶詰産業に関わる漁業者の居住地である。それらに対し、バンクーバー島東岸のナナイモでは、ニシン漁業とその塩ニシン製造業に携わる日本人が多かった。そして西岸のバムフィールド、ユクルーレットとトフィーノは1920年代にスティーブストンから移った日本人によって開拓された漁村である。ここではトロリング漁業（一本釣り）で沖合のスプリング・サーモン（キング・サーモン）を漁獲し、白人資本のサケ缶詰産業から脱却した生業が展開していた。一方、ミッションとギフォードのようにフレーザー川中流域もみられる。さらにウエストバンク、ウィンフィールドやバーノン・ウッドレイクの内陸地からの移動も確認できる。これらの集落は自由移動地・グランドフォークスの約100～150キロ北西に位置する。

このように、グランドフォークスへの移動を精査すると、バンクーバー以外からの移動者が多数を占めていた。それはスティーブストンからBC州各地への拡散的二次移動における三尾出身者のネットワークによるものであった。自由移動地へはパウエル地区の有力商業者が多かった、という伝聞とは大きく異なる史実が、この写真帳と関連資料から明らかになった。

**Forced Removal of Japanese Canadian in WWII:
Analysis of Memorial Photobook of Japanese-Canadian Families in Grand Forks “*Zairyu Nihonjin Kinen Syashinchou*”**

Norifumi Kawahara (Ritsumeikan University)

The Canadian Museum is at Mio, Mihama-chou in Wakayama Prefecture. Many documents are about many Canadian Japanese emigrants possessed here in. One is “Memorial Photobook of Japanese-Canadian Families Grand Forks (*Zairyu Nihonjin Kinen Syashinchou*).” Grand Forks Japanese society edited this book in March 1946. The family photographs consisting of 56 families 248 people are put in this photobook. It will be the winter season from 1945 through 46 that it was photographed. And there is the signature of four people who carried process explanation and that of photobook making in the end of a volume.

By the outbreak of war of the Pacific War of 1941, Forcibly Japanese moving it began in the next year. The reason for this is that the Esumatsu Nakatani family from Mio was brought here. When Nakatani family went over to Canada, they lived in Steveston. Afterwards Nakatani family moved to last Kelowna, furthermore they moved to Grand Forks for better agriculture environment in 1939. When Japanese forcibly moving it began in 1941, many people moved freely here with the help of Nakatani family.

In addition to the Japanese in this photobook, Grand Forks housed a total of 90 families 399 people, according to Custodian Case Files in Landscapes of Injustice Archive. Their most recent place of residence in Canada is Steveston, which consists of 32 families 143 people most of whom are from Mio. The removing people from Powell area have the second largest number, with 15 families 67 people. The third was Vancouver outside the Powell area, where 13 families 68 people lived. Many of these people are from Shiga prefecture.

The remaining 30% moved from other regions. Many of them were in coastal areas, and most of the Japanese were engaged in fishing. Rivers Inlet, Prince Rupert and Skeena River, as well as Steveston, are home to fishermen involved in the salmon canning industry. And, in Nanaimo on the east coast of Vancouver Island, many Japanese were involved in herring fishing and salt herring manufacturing. And Bamfield, Ucluelet and Tofino on western Vancouver Island are fishing villages pioneered by Japanese who moved from Steveston in the 1920s.

On the other hand, the Middle Fraser River is also found at Mission and Gifford. In addition, the removing people were from the West Bank, Winfield, and Vernon Woodlake inland areas. These settlements are located approximately 100-150 km to northwest of the free-moving grounds of Grand Forks.

The special analysis about removals to Grand Forks revealed that the majority of those moving were from other than Vancouver. It was due to a network of people from Mio in a diffuse secondary migration from Steveston to various parts of BC State. Previous studies have explained that there were many influential merchants from the Powell area to the free-moving area. However, in this study, historical facts that differ greatly from previous studies have been clarified.

カナダにおける日系史研究共同プロジェクトとの連携について

和泉 真澄（同志社大学）

近年日本では海外で生活している日本人や日本人移民の子孫である日系人に関する関心がメディアで高まっており、特にアメリカ合衆国やブラジル、ペルーなど、多くの日系人が政治や経済で活躍している地域に関しては、移民の存在について知識も徐々に浸透している。それに比べると、人数が少なく、有名政治家などを輩出していないオーストラリアやカナダに行った日本人移民の歴史はあまり知られることがない。一方、海外では、リドレス運動が成功したアメリカやカナダにおいては戦時強制移動・収容について知っている人は少なくはないが、他の連合国における日系人の戦争中の体験や第二次大戦以外の時代の日系人の生活などについて十分に知られているとは言えない。さらに、日本と日系人の移民先の国々との間では、関心事や主に研究される分野なども異なっており、知識ギャップを埋める様々な取り組みが必要である。

そこで本報告では、発表者が関わっている、日本とカナダをつなぐ二つの日系人史共同研究プロジェクトを紹介する。一つは 2014 年に開始された Landscapes of Injustice (LOI) とその後継プロジェクトである Past Wrongs Future Choices (PWFC) である。もう一つは、2019 年に開始され、2022 年に本格始動した From Mio だ。

LOI (2014 年～2021 年)は、ビクトリア大学にベースを置き、カナダの研究者と日系コミュニティが共同して、第二次大戦中のカナダ政府による日系人の財産没収に関する一次資料の調査とデータベース化、初等中等教育用教材、博物館展示「Broken Promises」を完成させた。LOI のウェブサイト (<https://www.landscapesofinjustice.com>) は、太平洋戦争前後の日系人の名簿、財産没収に関する政府記録、強制移動と財産没収政策の被害者が政府に送った抗議の手紙などを公開しており、数多くの日系カナダ人当事者や子孫、カナダ国内外の研究者などに利用されている。一方、新プロジェクトの PWFC は対象地域を拡大し、太平洋戦争期の連合国（カナダ・アメリカ合衆国・オーストラリア・ブラジルなど）における日系人政策と彼らの体験を比較研究する。100 名以上の研究者、日系人の子孫、ミュージアム関係者、アーティストなどが参加しており、2022 年 9 月に本格始動した。報告者は PWFC のアーカイブ班共同代表を務め、資料収集と様々なテーマに沿ったウェブ展示作成を指揮すると同時に、日本の研究グループや関連ミュージアムとの間のリエゾンを行なっている。

「From Mio」は、三尾地区からカナダに移住した人々の歴史を明らかにし、戦争が日系人から奪ったものについて改めて考察するための日加合同研究である。強制移動で消された歴史の回復だけでなく、移民労働を両国の産業発展、グローバルな資本主義経済の文脈で再検討し、また、カナダの先住民の主権に隣接した生活として位置づける。日本側もカナダ側も研究者だけでなく、日系人や移民の子孫当事者、その他の地域関係者が参画しつつ、研究交流、情報交換を進めている。オーラルヒストリーの収集や地域に残る歴史資料などを地道に発掘することで、戦前に多くの日系人が住んでいたにも関わらずほとんど研究が進んでいないバンクーバー島の調査や戦時中の自主移動地域などに関する研究を進める予定である。発表では、資料紹介のほか、国際共同研究ならではの強みと課題について情報共有したい。

International Collaborations between Canada and Japan on Japanese Overseas Migration

Masumi Izumi (Doshisha University)

In recent years, there has been a growing interest in the media in Japan regarding the Japanese living abroad and the Nikkei, descendants of Japanese immigrants. General knowledge is gradually spreading about the existence of ethnic Japanese communities in countries where the Nikkei are active in politics and economics, such as the United States, Brazil, and Peru. By contrast, history of Japanese Australians and Japanese Canadians are not widely known, as their numbers are smaller and because these countries have not produced famous Nikkei political figures. Outside Japan, on the other hand, wartime relocation and incarceration of the ethnic Japanese are relatively well known in the United States and Canada, where the Redress Movement was successful. Not enough is known, however, about the wartime experiences of Nikkei in other Allied nations. The lives of the Nikkei in periods other than World War II are also relatively unknown.

This paper introduces two international joint research projects in which the presenter is involved. One is “Landscapes of Injustice (LOI),” which started in 2014, and “Past Wrongs Future Choices (PWFC),” the sequence of the LOI project. Another is the “From Mio” project, which was launched in 2019.

Based in the University of Victoria, LOI was a joint research and public outreach project involving Canadian scholars and those in the Nikkei community. The main task of LOI was collecting primary sources related to wartime confiscation and dispossession of Japanese Canadians’ property. The project created web teaching materials of Japanese Canadian history, and produced a museum exhibit “Broken Promises.” The LOI website has been accessed by many Japanese Canadians for genealogical research as well as by researchers inside and outside Canada (<https://www.landscapesofinjustice.com>). The new project of PWFC has expanded the scope of research and aims to collect primary sources on historical experiences of the ethnic Japanese in the Allied nations (Canada, the US, Australia, and Brazil). Over 100 scholars, the Nikkei camp survivors and their descendants, museum curators, and artists from various countries are involved in this project. The presenter of this paper is a co-chair of the Archives Cluster of PWFC, and leading the material collection as well as the production of web-exhibits based on certain themes (laws, gardens, schools, religion, etc.). She also liaises research activities in Japan with those abroad.

“From Mio” aspires to uncover historical materials in Japan and Canada related to the migration of Mio villagers to Canada, and to re-assess the scale of what this transpacific community had lost as a result of Canadian policies during World War II. The project is joined by Japanese researchers and local activists in Mio, the descendants of Mio villagers in Canada, and non-Nikkei scholars of Japanese Canadian history in North America. The research group is currently studying the prewar Nikkei communities on Vancouver Island and self-supporting sites during World War II. In addition to introducing these joint research projects, the presenter will share her views on the benefits and challenges of international research collaborations.

都市先住民ホームレスの背景—植民地主義政策による影響を中心に—

徳田 恵 (神戸大学)

カナダ先住民の多くは居留地などの遠隔地に住んでいたが、1950年代を境に、都市に移住する者が急速に増えている。先住民の都市移住が増加するとともに、先住民のホームレスも増加している。先住民は非先住民よりもホームレスになる可能性が約8倍高いと指摘されている。それには、植民地主義政策による影響が大きく関与しているという。寄宿学校制度での先住民の子どもの肉体的、精神的、性的暴力の経験が、世代を超え、トラウマとなり先住民コミュニティ全体で継承されているという。現在、先住民は非先住民よりも薬物・アルコール依存、失業などで、より深刻な状況にあるが、そうした諸問題は、過去の暴力からトラウマを受けたという困難がかたちとなって現れている所以だという。そして、上記の諸問題が組み合わさり生じる代表的問題に、都市先住民のホームレスがあるといわれる。これまでの先住民のホームレス研究は、都市先住民の困難な状況を植民地主義政策による影響に過度に還元して考えてきた傾向が高い。そこでは、ジェンダーによる差異は十分に検討されてこなかったが、女性の先住民のホームレスは男性とは異なる条件によって生まれていることがわかる。かつてのカナダでの先住民に行われた侵略的歴史の影響は、過小評価することはできないものの、「構造」と個人の行動を決定する要因はしばしば乖離することはよく知られている。

本発表では、植民地主義政策による影響と直結する理由でホームレスとなっている者が具体的にどれくらい存在するのか、彼らの置かれている現状を二次資料から検討する。先住民・非先住民という二項対立的で構造的なステレオタイプからこぼれ落ちる、多様で複雑な問題をもつ可能性のある都市先住民女性の存在を指摘し、彼女らの実態を分析する上では、「先住民」というカテゴリーの軸に、「女性」というジェンダーに焦点化した軸も加えることが重要であることを指摘したい。

**Background of Urban Indigenous Homelessness:
Focusing on the Impact of Colonial Practices**

Megumi Tokuda (Kobe University)

Although many Indigenous people have lived on reserves and in other remote areas, the number of those migrating to cities has increased rapidly since the 1950s. Along with the increase in urban migration of Indigenous people, homelessness among them has also increased. Indigenous people are about eight times more likely to be homeless than non-Indigenous people. It is often said that this is largely due to the impact of colonial practices. The experiences of physical, mental, and sexual violence of Indigenous children in the residential school system are said to be traumatic and passed down throughout Indigenous communities from generation to generation. Currently, Indigenous people face more serious problems than non-Indigenous people in terms of alcohol and drug abuse, unemployment, and so on. A typical problem that arises from a combination of the above problems is homelessness. In studies of Indigenous homelessness to date, the difficult situations of urban Indigenous people have been tended to overly given back to the effects of colonial practices. There, gender differences have not been adequately examined, but it is clear that Indigenous homelessness women is created by different conditions than Indigenous homeless men. While the impact of the history of colonial practices on Indigenous people in Canada cannot be underestimated, it is well known that "structures" and the factors that determine individual behavior often diverge.

In this presentation, I will examine the specific number of people who are homeless for reasons directly related to the impact of colonial practices, and examine their current situation from secondary sources. I will point out the existence of urban Indigenous women who may have diverse and complex problems that cannot grasp fully from the dichotomous and structural stereotype of Indigenous and non-Indigenous people, and point out that in analyzing their actual situation, it is important to add a gender-focused axis of "women" to the axis of "Indigenous" category.

セッション I

1960・70年代におけるカナダ・ナショナリズムの思想的多面性

高橋 侑生（京都大学）

本発表の目標は、1960年代末から70年代にかけて一定の影響力をもった「英語系」カナダ・ナショナリズムの思想的な多面性を明らかにすることである。

この時期のカナダ政治史においては、英語系カナダにおけるナショナリズムよりも、ケベック・ナショナリズムの高揚が印象的である。1968年には、ケベック自由党を離脱したルネ・レヴェックが独立主義政党 Parti Québécois を設立した。同年の連邦総選挙では、ピエール・トルドーが、ケベック独立主義に厳しく対処するフランス語系の政治家として旋風を巻き起こした。1971年の多文化主義宣言が、10月危機以降の情勢において、ケベック・ナショナリズムに対する連邦主義的でユニナショナルな応答でもあったことは周知の通りである。

カナダの国制をめぐる連邦主義者とケベック・ナショナリストの対立は、多様な文化が公正で持続可能な仕方で共存するための様々な構想を生み出した。グローバル化の進展を背景に文化的共存が世界的な課題となったことによって、こうしたカナダの経験は広く参照されている。多文化主義が規範的政治理論における重要論点となったのも、カナダ出身の政治理論家（例えば、Ch・テイラーやW・キムリッカ）の影響下においてであった。もっとも、多文化主義をめぐる政治理論は、冷戦終結以降に確立されたこともあって、文化間の関係性を不安定化させている資本主義のグローバルな力学については多くを語っていない。これに対して、1960年代末から70年代にかけてのカナダにおいて、文化をめぐる政治思想は、資本主義に対する問題意識と絡み合っていた。カナダ政治思想史のこうした位相——トルドーとレヴェックを両極とする思想的スペクトルでは十分に捉えきれない——は、今日、改めて注目される必要がある。

本発表は、こうした問題関心から、1960年代末から70年代の英語系カナダにおけるナショナリズムを検討する。この時期は世界的に左傾化した時代であり、カナダも例外ではない。ケベック・ナショナリズムは、英語系の「資本」からの解放という目標によって動機づけられていた。並行して、英語系カナダにおいては、左派知識人を中心にアメリカ資本に対する懸念が広がっていた。例えば、1968年の連邦総選挙において、新民主党は、多国籍企業の影響力を制約することを提言した「ワトキンス報告書」を支持している。1970年代になると、こうした左派ナショナリズムは、外国投資審査庁（FIRA）やペトロカナダの創設といった政策的成果を生み出した。しかし、彼らは一枚岩だった訳ではない。実際、1969年の新民主党連邦党大会は、追求すべきナショナリズムの構想をめぐる劇的な対立に見舞われた。

そこで本発表は、A・ロットステイン、Ch・テイラー、M・ワトキンス、J・ラクサーといった左派知識人の言説を整理し、同時期におけるカナダ・ナショナリズムの思想的多面性を明らかにする。その際に、彼らがどのようにケベック・ナショナリズムを取り上げ、国制と文化の問題を理論化したのかという点についても検討する。

The Variety of English Canadian Nationalism in the 1960s and 1970s

Yusei Takahashi (Kyoto University)

The purpose of this presentation is to show the variety of “English” Canadian nationalism, which had a certain influence on Canadian politics during the late 1960s and 1970s.

During this period, the rise of Quebec nationalism was more impressive than that of the English Canadian nationalism. In 1968, René Lévesque, who had left the Quebec Liberal Party, founded the Parti Québécois. That year, Pierre Trudeau won the federal election as a francophone politician who was tough on Quebec separatism. It is well known that the implementation of the multiculturalism policy was a federalist and uni-national response to Quebec nationalism in the context of the October Crisis.

In the conflict between federalists and Quebec nationalists over Canada's constitution, different conceptions of how different cultures could coexist in a fair and sustainable way were formulated. These have been widely referenced as cultural coexistence has become a worldwide issue in the context of globalization. It was under the influence of Canadian political theorists (e.g., Ch. Taylor and W. Kymlicka) that multiculturalism became an important topic in normative political theory. However, political theory on multiculturalism has not actively discussed the global dynamics of capitalism that destabilize relations between cultures, partly because this discipline was established after the end of the Cold War. By contrast, in Canada in the late 1960s and 1970s, political thought about culture was intertwined with concerns about capitalism. These aspects of the history of Canadian political thought, which cannot be fully captured by a spectrum that places Trudeau and Levesque at the extremes, deserve more attention today.

To shed light on these aspects, we will examine nationalism in English Canada during the late 1960s and 1970s. During this period, many people were moving to the left, and Canadians were no exception. Quebec nationalism was motivated by the goal of liberation from Anglophone “capital.” In parallel, the concern about American capital was spreading among left intellectuals in English Canada. In the 1968 federal election, for example, the New Democratic Party endorsed the Watkins Report which recommended limiting the influence of multinational corporations. In the 1970s, left nationalists had some achievements, including the establishment of the Foreign Investment Review Agency (FIRA) and Petro-Canada. But they were not monolithic. Indeed, the New Democratic Party's federal convention in October 1969 was marked by a dramatic confrontation over the conception of Canadian nationalism to be pursued.

Therefore, this presentation will organize the discourses of left intellectuals, such as A. Rotstein, Ch. Taylor, M. Watkins, and J. Laxer, to show the variety of English Canadian nationalism. We will also examine how they took up Quebec nationalism and theorized the issues of constitution and culture.

カナダモデルへの転換：聴覚障がい者から手話者へ

伊藤 泰子（名古屋学院大学非常勤講師）

耳が聞こえない子どもへの教育法には口話法教育と手話法教育の2つがある。フランスから始まった手話法教育がアメリカに、そしてカナダに広まった。ドイツからは口話法教育が始まった

口話法教育とは、音声言語のみの教育であり、単一言語社会に生きることをめざす。手話法教育とは、手話言語を母語として身に着け、音声言語の文字を習得する、二言語二文化教育となる。

カナダも日本も古くは手話法教育であったが、1880年世界ろう教育学会で聾学校で手話を使うことを禁止することが決定され、その後は口話法教育が主になった。

口話法教育の根源には手話言語を音声言語の下に見る、不平等な関係がある。一方、手話法教育の根源には音声言語と手話言語と対等に見る言語の対等な関係がある。

カナダのろう学校でも口話法教育が進められたが、聾学校の寄宿舎では手話がとびかい、手話言語は継承され、絶滅することはなかった。多文化主義法(1988年)制定の頃、手話言語を母語とする言語的マイノリティとして、ろう者が聾学校での手話での教育を要望して実現した。その実現に力を貸した言語学者、Jim Cummins は手話言語はろう者の第一言語(=母語)であるという理由から母語による教育を主張した。1993年、ASL(アメリカ手話)とLSQ(ケベック手話)を教室での教育における公用語とすることが条例になり、オンタリオ州教育法の一部になった。その後も、二言語二文化ろう教育が聾学校で続けられている。一般大学にDeaf Studies、手話通訳養成講座がある。Accessible Canada Act(2019)では、手話言語がろう者の第一言語であると明記して、手話言語によるコミュニケーションのバリアフリーを求めている。このように、カナダではいつも言語の平等が保持されてきた

一方、日本では、聴覚障がい児と認定され、手話言語を母語として身につける手話環境がない。補聴器や人工内耳を装用して、普通学校で日本語で授業を受ける。手話は福祉の分野のサポート手段に過ぎない。日本社会では音声言語と手話言語の対等ではない関係が続いている。

今こそ、日本ではカナダモデルへの転換、具体的に言うと、聴覚障がい者から手話者への転換することを求めたい。この転換が実現すると、日本語と手話言語の対等な関係が築かれ、日本語話者と手話者が対等な関係になるであろう。そのためには、手話言語を母語として身につけることができる手話環境が増えて、手話言語が日本社会に広まって、手話言語の音声言語とは異なる特徴や手話言語の文化が知られて、音声言語と手話言語の関係の不平等さが減るような社会にするための具体案を提示したいと思う。

Converting to the Canadian Model: From Hearing Impaired to Signers

Yasuko Ito (Nagoya Gakuin University)

There are two methods of teaching deaf children: oral and sign language education. Sign language education began in France and spread to the United States and then to Canada. Oral education began in Germany. Oral education is an education in the spoken language only and aims at living in a monolingual society. Sign language education is a bilingual, bicultural education in which students acquire a signed language as their mother tongue and acquire the written form of the spoken language. In 1880, the World Association for the Education of the Deaf decided to prohibit the use of sign language in schools for the deaf, and since then, oral education has been the main method of teaching deaf children.

At the root of oral method education is an unequal relationship of language in which the signed language is viewed below the spoken language. On the other hand, the root of sign language education is the equal relationship of language, which sees spoken language and signed language on an equal footing.

Around the time of the enactment of the Multiculturalism Act (1988), the Deaf, as a linguistic minority whose mother tongue is a signed language, requested and received education in sign language in schools for the deaf. Linguist Jim Cummins, who was instrumental in making this happen, argued for education in the mother tongue on the grounds that the signed language is the first language (i.e., mother tongue) of the Deaf. In 1993, ASL (American Sign Language) and LSQ (Quebec Sign Language) were made official languages of classroom instruction and became part of the Ontario Education Act. Bilingual and bicultural deaf education has continued in schools for the deaf since then. There are also Deaf Studies and sign language interpreter training courses in general universities.

The Accessible Canada Act (2019) calls for barrier-free communication in the sign language by specifying that the sign language is the first language of the Deaf. Thus, language equality has always been maintained in Canada.

On the other hand, in Japan, there is no sign language environment where children are identified as hearing impaired and acquire the sign language as their mother tongue. They wear hearing aids or cochlear implants and take classes in Japanese at regular schools. Sign language is only a means of support in the field of welfare. In Japanese society, the relationship between spoken and signed languages is not equal.

Now is the time for Japan to make the transition to the Canadian model, or more specifically, from hearing impaired to signers. This conversion would create an equal relationship between the Japanese language and the sign language, and between Japanese speakers and signers on an equal footing. For this purpose, I would like to present a concrete proposal for a society in which the number of sign environments in which people can acquire a sign language as their mother tongue increases, the sign language spreads throughout Japanese society, the characteristics of sign languages that are different from those of spoken languages and the culture of sign languages become known, and the inequality in the relationship between spoken and signed languages is reduced.

セッションⅡ

旅行メディアにおけるカナダの魅力 — 『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編と 『るるぶ カナダ』シリーズの事例—

岩田 晋典（愛知大学）

本報告は、旅行メディアの内容分析をもとにツーリズムの中でカナダの魅力がどのように表象されてきたのかを探ることを目的にしている。

分析ではとくに、日本語圏で最もメジャーな『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編と『るるぶ カナダ』シリーズという二シリーズに焦点を当て、おもに1990年以降両者が表象してきたカナダの魅力を明らかにする。

分析から得られた知見は以下の三点である。第一に、地理的にみれば、カナダの魅力はほぼ東西の二地域で構成されている。すなわち、ブリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州という西部と、オンタリオ州とケベック州の南部そしてプリンス・エドワード・アイランド州の東部である。カナダ中央部・北部の紹介箇所はたしかに存在するとしても、それがカナダにおけるメインのデスティネーションに選ばれることはない。

第二が、カナディアンロッキーからナイアガラの滝、紅葉、氷河、オーロラなど、何らかの自然に関するものが大多数を占めている点である。『赤毛のアン』に関しても、しばしばグリーン・ゲイブルズを取り囲む自然環境がクローズアップされ、その自然性が強調されることが珍しくない。

そして第三に、旅行メディアにおいてカナダの多文化主義的側面は無視されていると言っても過言ではない。たしかに先住民に関する文化要素がお土産物として取り上げられたり、近年トロントの各エスニックタウンが名所として扱われることもある。けれども、たとえば「多文化主義」という表現が旅行メディアでほとんど用いられないことが示すように、多文化共生的表象は多文化主義国家カナダという国家イメージと比べて、著しく少ないと言えるレベルにある。

**The Attractiveness of Canada in Travel Media:
A Case Study of “*Chikyu no Arukikata Guidebook*” Series,
Canada edition, and “*Rurubu Canada*” Series**

Shinsuke Iwata (Aichi University)

The purpose of this presentation is to explore how the attractiveness of Canada has been represented in tourism through a content analysis of travel media.

The analysis focuses on two of Japan's most popular travel media: the “*Chikyu no Arukikata Guidebook*” series and the “*Rurubu Canada*” series. The aim is to clarify how the appeal of Canada has been portrayed in both series over the past 30 years.

Despite the differences between the two series in terms of format, volume, or target audience, the analysis reveals the following three points in common. Firstly, geographically, Canada's attractiveness is primarily concentrated in two regions: the west (British Columbia and Alberta) and the east (Ontario, southern Quebec, and Prince Edward Island). Central Canada, for example, would never be chosen as a main attraction in Canada, even if a part to showcase it exists.

Secondly, a significant portion of Canada's attractions are based on natural resources, such as the Canadian Rockies, Niagara Falls, fall foliage, glaciers, auroras, and wildlife. Even the sections on “Anne of Green Gables” emphasize the natural landscape surrounding Green Gables, representing it as a component of the Canadian nature.

And thirdly, it is evident that the multicultural aspect of Canada is largely ignored, as indicated by the fact that the term “multiculturalism” is rarely to find. Although cultural elements related to indigenous peoples are often displayed in souvenirs and other products, and ethnic towns have been introduced as a highlight of Toronto in recent years, it can be said that they have diverged from the national image of Canada as a multicultural nation.

セッションⅡ

カナダの先住民観光

半藤 将代（カナダ観光局）

カナダの先住民は、1万4千年にわたって大地に根ざし、自然と調和して生きてきた。近年カナダでは、同化政策などによって虐げられた先住民の歴史と真摯に向き合い、国をあげて和解と共生に取り組んでいる。そうした中、観光においても、先住民が継承してきた智恵や文化を、先住民自身の案内で体験することによって、彼らが現代社会に語りかける「物語」を肌で感じるという、新しいスタイルが重要なテーマのひとつとなっている。

リスペクトと共感にもとづく先住民観光は、先住民への理解を深め、また、先住民自身が彼らの文化の大切さを改めて認識することにもつながり、社会的、経済的な復興を後押しする。「リジェネラティブ・ツーリズム（再生型観光）」を推進するとともに、人間が自然と調和し、多様性に富んだ共生社会を実現するための大きな力ともなるだろう。

この報告では、カナダ先住民観光の現在の取り組みを紹介するとともに、各地域の事例から、先住民観光の果たす役割や可能性について考えたい。

Indigenous Tourism in Canada

Masayo Hando (Destination Canada)

The indigenous people of Canada, laying down roots and connected with the land over 14,000 years, have lived in harmony with nature.

In recent years, Canada has sincerely confronted the history of its indigenous people, who have suffered from the harm that has been inflicted such as the assimilation policy, and the entire country has been making efforts toward reconciliation establishing and maintaining a mutually respectful relationship between indigenous and non-indigenous peoples. The tourism owned and managed by indigenous people has been increasingly important to support reconciliation. Visitors experience the wisdom and culture shared by indigenous people through the guidance of the people themselves and encounter first-hand the “stories” they tell.

Based on respect and empathy, indigenous tourism deepens understanding of indigenous people and also leads to a renewed awareness among these people of the importance of their own culture, promoting social and economic revitalization. As well as promoting “regenerative tourism,” this also contributes significantly to realizing a richly diverse symbiotic society in which people live in harmony with nature.

This report aims to introduce the current efforts made to develop and promote indigenous tourism in Canada, showcase examples of indigenous tourism being promoted in various regions of Canada and consider its power and possibilities.

セッションⅡ

1970年日本万国博覧会におけるカナダの忘却された存在感 —観光とナショナリズム—

鈴木 健司（同志社女子大学）

カナダは1970年日本万国博覧会への参加を他国に先駆けて公式に表明し、その後の出展契約や建築工事も外国政府としては最も早く完了した。博覧会の運営実務においても1967年モントリオール万国博覧会の開催国としての経験を活かして、カナダは先導的役割を果たした。

その背景には、日本の経済成長に伴って日加間の経済関係が急速に深化し、カナダにとって日本の重要性が増大しつつあったという事情がある。それに加えて、連邦結成から2世紀目を迎えたカナダにとっては、新たな国家アイデンティティを模索し独自の外交を追求していくうえで、日本を含む太平洋地域への進出は重要課題であり、日本万国博への注力はそのための国家戦略の一環であった。ピエール・トルドー首相は式典挨拶において、日本と太平洋諸国を「新しい西方」と称した。

カナダにとって日本万国博覧会は、連邦結成100周年記念となるモントリオール万国博の直接の延長上にあつて、ナショナリズムのあり様を示すものとして認識されていた。その結果として、日本万国博に対するカナダの関与と貢献の大きさは諸外国の中でも際立っており、その存在感は光彩を放っていた。しかし、今ではこれらの事実が注目されることは少ない。

本報告では、博覧会の公式記録及び当時のカナダと日本におけるメディア報道を用いて事実関係を整理、構築したうえで、日本万国博覧会においてカナダが果たした役割を確認し、再評価するとともに、そのカナダにとっての意義を考察する。とくに、この博覧会の祝祭的イベントとしての成功要因という観点から、カナダの積極的関与の様相を検証する。

Canada's Forgotten Presence at the 1970 Japan World Exposition: Tourism and Nationalism

Kenji Suzuki (Doshisha Women's College of Liberal Arts)

Canada was the first country to formally announce its participation in the 1970 Japan World Exposition. It was also the first foreign government to complete the subsequent exhibition contract and pavilion construction. Drawing on its experience as the host country of the World's Fair in Montreal in 1967, Canada played a leading role in management of the exposition.

One of the reasons for this was the rapid deepening of economic relations between Canada and Japan in step with Japan's economic growth, and the growing importance of Japan to Canada. In addition, as Canada entered its second century since the formation of the Confederation, expansion into the Pacific region, including Japan, was an important issue for Canada as it sought a new national identity and pursued its own unique foreign policy. The focus on the Japan Expo was part of the national strategy to achieve this. In his ceremonial address, Prime Minister Pierre Trudeau referred to Japan and the Pacific nations as the "New West."

For Canada, the Japan World Exposition was recognized as a direct extension of the Montreal Expo 67, which celebrated the 100th anniversary of the Confederation, and as an expression of the state of nationalism. As a result, Canada's involvement and contribution to the Japan Expo stood out among other countries, and its presence was remarkable. Today, however, these facts receive little attention.

This report will examine Canada's role in the Japan World Exposition and its significance to Canada, based on a review of the official records of the exposition and media reports from Canada and Japan at the time. In particular, this report will examine aspects of Canada's active involvement in Expo 70 from the perspective of the factors that contributed to its success as a festive event.